

# 本多啓子 論文内容の要旨

## 主 論 文

(重症心身障害者施設入所者に対する専門的口腔保健管理の効果)

(本多 啓子)

(口腔衛生学会雑誌・56巻1号 2006年 印刷中)

(原稿枚数 28枚)

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻

(主任指導教員：(代理)大井久美子教授)

## 緒 言

障害者施設入所者の口腔内の状態は、硬組織ならびに軟組織ともに劣悪であることが報告されている。また障害者に対する歯科治療は全身管理等の制約から、対応できる施設は限られている現状である。歯科専門家が配置されている施設は少なく、配置されている施設においても、定期的な予防管理システムが整備されているところは半数以下であることが報告されている。障害者に対する過去の介入研究は第二次予防としての歯科治療に対する効果を評価したものが多く、第一次予防としての定期的予防管理の効果を評価した研究は少ない。

本研究の目的は6歳～60歳の重症心身障害者施設入所者を対象に、施設における予防管理を中心とした8年間の介入の効果を追跡調査し評価することであった。

## 対象と方法

長崎県内の某重症心身障害者施設に1993年度に在所していた122名全員(男性67名、女性55名)を対象とした。1名の歯科医師が毎月1回口腔診査ならびに予防処置を行うとともに、2名の常勤の歯科衛生士が歯科医師の指示のもとに、歯石除去、歯周ポケット洗浄、個別刷牙指導を含む専門的口腔ケアを実施した。介護職員に対しても歯科衛生士が定期的な口腔ケア指導を行い、8年後にその効果を評価した。この間に退所者や死亡者はいなかった。対象者が有する疾患は、主に精神発達遅滞(94.3%)、てんかん(60.7%)、脳性麻痺(51.6%)であった。

診査項目は、歯牙硬組織については現在歯数、未処置歯数(以下D歯数)、処置歯数(以下F歯数)、喪失歯数、歯肉の状態の評価としてGingival Index、歯垢付着と歯石沈着の評価としてOral Hygiene Indexを介入前後で評価した。

分析方法：

(1) 現在歯数、D歯数、F歯数および8年間の変化について

1993年度ならびに2001年度における対象者毎の現在歯数、D歯数、F歯数から変化量を算出し、1993年度の年齢群別に集計した。一方、1993年度のコントロールとして1993年の厚生省歯科疾患実態調査(以下、実調)の素データを1993年度の対象者の各年齢における人数分布に対応させて調整し、各年齢群の現在歯数、D歯数、F

歯数の平均値を算出した。2001年のコントロールとして1999年の実調の素データから同様の方法で算出した。対象者の8年間の各指標の変化量を実調値の変化量と比較した。

## (2) 歯肉の状態・歯垢付着・歯石沈着の変化について

1993年度入所者の年齢群別歯肉の状態・歯垢付着・歯石沈着の個人コード値の分布と同対象者の8年後の2001年度の分布を比較した。

## 結 果

- 1) ベースライン時ならびに8年間の介入後の一人平均現在歯数、一人平均D歯数、一人平均F歯数は全て実調値よりも低い値であった。
- 2) 入所者の1993年度から8年間の口腔内の変化は、一人平均現在歯数は22.8歯から22.2歯へと0.6歯の減少、一人平均D歯数は0.92歯から0.53歯へと0.39歯減少したが、一人平均F歯数は1.93歯から4.16歯へと2.23歯増加した。
- 3) 8年間の年齢群別一人平均D歯数、F歯数の増加量は、特に30歳代・40歳代では実調値よりも大きかった。しかし2001年度における入所者の一人平均F歯数、D歯数は実調の値よりもどの年齢群別においても低かった。
- 4) 歯肉の状態、歯垢付着、歯石沈着はどの年齢群別でも有意な改善がみられた。

## 考 察

### 1) 現在歯数、D歯数、F歯数の変化について

ベースライン(1993年)における入所者の一人平均現在歯数、一人平均D歯数、一人平均F歯数はどの年齢群においても実調値より低く、逆に一人平均健全歯数は実調値よりも高い値であったことから、入所者はベースライン以前に保存的歯科治療よりも抜歯処置を多く受けてきたことが推察される。しかし、歯科治療そのものを受ける機会が少なかったため、過剰な切削治療を免れ、健全歯が多く残存したものと考えられる。施設に入所している障害者のう蝕罹患状況は、健常者と同等または低いとの報告があるが、本研究の結果からも一人平均D歯数、一人平均F歯数はどの年齢群においても実調値よりも低い値であった。8年間でD歯数が減少し、F歯数が増加したのは、定期的な管理により、う蝕が発見されやすい環境となり未処置歯が確実に治療されたためであろう。

### 2) 歯肉の状態・歯垢付着・歯石沈着の変化について

6カ月毎の歯科医師による健診で問題のある患者がスクリーニングされ、2名の常勤の歯科衛生士によって必要に応じた口腔ケアが行われたことに加えて、入所者に直接接する介護者に対して歯科衛生士が各入所者の口腔ケアの問題点を伝え、口腔ケアの手法等も併せて指導してきたことが、歯周疾患改善に寄与したものと推察される。